

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 30 日現在

機関番号：10104

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2009～2012

課題番号：21320117

研究課題名（和文）19～20 世紀北東アジア史のなかのサハリン・樺太

研究課題名（英文）Sakhalin-Karafuto in the history of Northeast Asia in the nineteenth-and twentieth-centuries

研究代表者

今西 一（IMANISHI HAJIME）

小樽商科大学・商学部・教授

研究者番号：20133621

研究成果の概要（和文）：我々は、サハリン・樺太史研究に必要な資料を日本およびロシアにおいて調査した。特にサハリン国立文書館所蔵資料に関しては、継続的な調査を行った。一次史料および聞き取り調査によって以下のことが明らかにされた。①日露戦争期、サハリン占領の際に、日本軍はサハリン島民であるロシア人を強制的に大陸に送還した。②サハリン在住朝鮮人は、日本による強制連行によってサハリンに来たとされているが、それ以前から、北東アジアの広い地域を移動していた者も少なくなかった。③1945 年 8 月、いわゆる終戦の後も約 30 万人の日本人がサハリンに残され、彼らは、ソ連による統治を経験し、日本人・朝鮮人・ロシア人が構成する多民族社会における生活を経験した。

研究成果の概要（英文）：We investigated the documents necessary for the history of Sakhalin/Karafuto study in Japan and Russia. In particular, we conducted continuous investigation of the documents which are kept in the Sakhalin National Archives. The primary documents and interviews have made clear the following matters. First, at the end of the Russo-Japanese War, when occupying Sakhalin, the Japanese military forcibly repatriated the local Russian citizens to the continental part of Russia. Second, though the majority of the Korean people in Sakhalin have been said to be made to come to Sakhalin via forcible escort by Japan, in fact many Koreans had migrated from a wide area in Northeast Asia. Many had come to Sakhalin of their own will before the time of forcible escort. Third, we have showed that approximately 300,000 Japanese were left in Sakhalin after WWII and had experience of living in a multiethnic society where the Japanese, Korean and Russian people coexisted together under the rule of Soviet Union.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009 年度	3,900,000	1,170,000	5,070,000
2010 年度	4,000,000	1,200,000	5,200,000
2011 年度	3,800,000	1,140,000	4,940,000
2012 年度	1,800,000	540,000	2,340,000
年度			
総計	13,500,000	4,050,000	17,550,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学 日本史

キーワード：サハリン 樺太 植民地 帝国 ディアスポラ

1. 研究開始当初の背景

これまでの日本史学において、樺太という地域は、前近代における先住民族による交易史、あるいは幕末における日露外交史、日露交渉史の舞台として注目されてきた。しかし、近代以降については、日本植民地史研究の多くの蓄積にもかかわらず、樺太研究は大きく立ち遅れている。その要因の一つとして日本植民地史研究が帝国主義論を理論的前提として他民族の抑圧・収奪の過程として植民地支配に関心を払ってきたことが指摘できる。住民のほとんどが日本人であり、移住地として内地（本国）と似通った社会構造にあると見なされている樺太は、上記の問題関心からすると、研究の対象とはならなかったであろう。

しかし、近年の植民地史研究は植民地への移民が現地社会のなかでどのような状況にあったのかに関心を向け、国家（総督府等）対植民地民衆という従来の植民地像を克服し、植民地を一つの地域として見ること、その地域社会を中国人、朝鮮人、日本人が構成する複合的な多民族社会とみなすことにより、植民地史研究の枠を大きく広げること成功している。

2. 研究の目的

(1) 人的交流・地域社会の形成

戦前日本では、さまざまな刊行物において「北海道・樺太」が並記されてきた。企業も北海道に本社を置く企業は樺太に支店を展開し、樺太は北海道の延長線上にあると言ってよいだろう。北海道史研究は長年の蓄積があり、移民、産業、アイヌ民族史などさまざまな分野の歴史が書かれている。ところが同時代には一体のものとして認識されていた樺太は、北海道史の進展に比べると著しく研究が遅れているのである。北海道史の蓄積を生かしつつ人的交流・地域社会の形成という観点から樺太史を描くことが求められている。

(2) 北東アジア史

本科研では近年急速に進展している韓国、中国、極東ロシアにおける北東アジア史研究の現状を踏まえて、これらの諸国の歴史学会で定着している「北東アジア」という地域概念に樺太が適合していることに注目している。今後の日本史学は、これら近隣諸国の歴史学会、歴史研究者、研究機関、資料所蔵機関との協力のもとに行われるべきだが、とりわけ樺太史においては喫緊の課題であろう。本科研の研究代表者、研究分担者は、すでにサハリン国立大学の M.S. ヴィソーコフ教授との交流を開始し、サハリン・樺太史に関する日ロ双方での国際シンポジウムを開催し、

刊行物を企画している。サハリン国立文書館（ユジノサハリンスク）には樺太庁文書が所蔵されており、未整理資料もあることから日本人研究者の協力が求められている。中国ではハルビン、長春、大連所在の図書館が所蔵する膨大な日本語文献があり、また各地档案馆の文書公開も進んでいる。樺太はロシアのみならず中国、朝鮮との関わりも深い。われわれの樺太史研究は、近隣諸国の研究者との協力、所蔵資料の共同調査によって推進する予定である。

3. 研究の方法

(1) 資料調査・聞き取り調査

① 近世・幕末維新时期…これまで樺太をめぐる日露外交史研究が用いてきた在ロシア資料（ロシア語）を引き続き調査・分析するとともに北海道側に残されている北蝦夷地関係文書の調査・分析を進める。

② 明治～昭和戦前期…在ロシア資料の調査を集団的に行い、ロシア政府のサハリン政策の推移やサハリン島の実態を示す資料を調査する。また、中国東北地方所在資料を調査し、清および東北政権、満洲国期のサハリンに関する資料を調査する。移民と物流の分野からは在韓国資料の調査を行う。サハリン国立文書館の樺太庁文書に関しては日本語目録の完成に向けて作業を進める。

③ 戦時・戦後期…在ロシア資料（ロシア語）、サハリン国立文書館所蔵のソ連政府資料（ロシア語）の調査を行うとともに、日本国内（北海道を中心として）の引揚者に対する聞き取り調査を継続的に行う。また、サハリン残留朝鮮人についても韓国・安山市「故郷の村」在住のサハリンからの帰国者にインタビュー調査を行う。

(2) 研究会・シンポジウム

① サハリン・樺太史研究会

札幌において年間4回を目途にサハリン・樺太史研究会を定期的に開催する。研究会では、本科研メンバーによる研究報告を行うとともに、本科研メンバーではない研究者を国内外から招聘し、サハリン・樺太史をはじめ帝国と植民地に関する最新の研究成果にふれることにしたい。

② シンポジウム

札幌において北海道外およびロシア、韓国、アメリカの研究者も招き、サハリン史および帝国と植民地史に関するシンポジウムを開催する。

(3) 刊行物

① 論文集…日露戦争期のサハリン・樺太史についての論文集を企画している。ロシア史のアプローチと日本史のアプローチの研究を網羅し、今後のサハリン・樺太史の典型的な研究成果となるよう努める。また、韓国・安

山における聞き取り調査結果を中心に朝鮮人のサハリン移民・在住者の歴史を一書にまとめることにする。

②雑誌…『サハリン・樺太史研究』としてまず第1号を刊行し、その後も定期的な刊行に努める。

4. 研究成果

(1) 資料調査・聞き取り調査

① 国内

立命館大学所蔵中川小十郎文書を調査し、樺太関係部分を写真撮影の上、DVDとして保存した。

② ロシア

サハリン国立文書館には2009年度以降毎年訪れ、日本語資料の目録作成を進めた。

ロシア2009年度にはウラジオストクにあるロシア極東歴史文書館を訪問し、極東地方行政に関するロシア語資料を検索、閲覧した。また、2011年度にはハバロフスク、ウラジオストクを訪問し、各地文書館の資料調査を行うとともにコリアン・コミュニティの見学、聞き取り調査を行った。ウラジオストク文書館には保障占領期北サハリンの行政文書(日本語を含む)が未整理のまま大量に所蔵されていることがわかった。

③ 中国

2010年度には大連、延吉、ハルビンを訪問し黒竜江省図書館、ハルビン市図書館、731舞台博物館等において文献検索、閲覧を行った。延吉では朝鮮族の市民に聞き取り調査を行った。

④ 韓国

2009年度9月には韓国・安山市を訪問し、サハリンからの帰国者にインタビューを行った。この調査には北海道および東京から日本人研究者が、そして地元から漢陽大学の研究者が参加し、研究者同士の交流もおこなうことができた。

⑤ 北海道における聞き取り調査

2009年11月には旭川市にて全国樺太連盟旭川支部の方々と面会し長時間にわたってインタビューを行った。このほか本科研メンバー数人のグループにより樺太引揚者からの聞き取り調査を行っている。

⑥ 資料整理

『樺太日日新聞』マイクロフィルムの全面PDF化作業を行った。

(2) 研究会・シンポジウム

・2010年8月、延辺大学、日中両国研究者による中国東北・満洲国史研究に関するシンポジウム開催。

・2010年9月、国立サハリン大学、チューホフ・シンポジウム開催。

・2010年10月、北海道大学、小樽商科大学

札幌サテライト、「ロシアと日本の研究者の目からみる日露戦争とサハリン戦の歴史」開催。

・2011年8月、稚内北星学園大学、「海峡をまたぐ歴史：日本とロシアの歴史家の目でみる」開催。

・2011年12月、北海道大学、小樽商科大学札幌サテライト、「帝国日本研究の課題と方法」開催。

・2012年8月、北海道大学、小樽商科大学札幌サテライト、『北東アジアのコリアン・ディアスポラ』書評会およびシンポジウム「植民地社会の比較史」開催。

(3) 刊行物

本科研メンバーによる共同研究の成果として下記の3点を出版刊行した。

① 『サハリン・樺太史研究』第1集、2010年7月刊、全183頁。

② 原暉之編著『日露戦争とサハリン島』北海道大学出版会、2011年、全426頁。

③ 今西一編著『北東アジアのコリアン・ディアスポラ—サハリン・樺太を中心に—』小樽商科大学出版会、2012年、全339頁。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計33件)

① 竹野学、保障占領下北樺太における日本人の活動(1920~1925)、経済学研究(北海道大学)、査読無、第62巻第3号、2013、31-48

② 田村将人、V. N. ヴァシーリエフのアイヌ物質資料の収集過程に関する資料、北海道開拓記念館研究紀要、査読有、第41号、2013、153-168

③ 麓慎一、日露戦後における新潟と対岸地域、環東アジア研究センター年報、査読無、第8号、2013、65-85

④ 原暉之、日露戦争期のサハリン難民とロシア政府の救恤政策、ロシア史研究、査読有、第91号、2012、3-22

⑤ 石川亮太、仁川をめぐるロシア定期航路構築と華僑商人—大韓帝国時期を中心に—(韓国語)、仁川文化研究、査読無、第9号、2012、17-79

⑥ 谷本晃久、近代アイヌの描く未来図—「近文旧土人保護地」自主管理の夢—、鶴飼政志・川口暁弘編『きのうの日本：近代社会と忘却された未来』有志舎、査読無、論文集、2012、78-116

⑦ 金鎔基、サハリン朝鮮人の戦後史：成勳模氏の証言を中心に、人文研究(小樽商科大学)、査読無、第123輯、2012、77-121

⑧ 井潤裕、「占守島の戦い」再考：「8月15日史観」を問い直す、別冊環、査読無、

- 第 19 号、2012、85-96
- ⑨ 今西一、歴史学と〈表彰〉、人文研究(小樽商科大学)、査読無、第 123 輯、2012、1-22
- ⑩ 原暉之、ロシア革命とシベリア出兵、和田春樹他編『東アジア近現代通史 4 社会主義とナショナリズム』、査読無、論文集、2011、43-65
- ⑪ 谷本晃久、移動する地名：オホーツク海沿岸における場所請負制の浸透とアイヌの地名認識、アイヌ語地名研究、査読無、第 14 号、2011、3-12
- ⑫ 麓慎一、JAPAN AND RUSSIAN FAR EAST AREA IN THE JAPAN RUSSIA POSTWAR, ロシア極東大学編『ロシア極東における国際関係の諸問題：歴史と現代』、査読無、論文集、2011、68-72
- ⑬ 井澗裕、占守島・1945 年 8 月、境界研究、査読有、第 2 号、2011、31-64
- ⑭ 今西一、樺太・サハリンの朝鮮人、人文研究(小樽商科大学)、査読無、第 121 輯、2011、1-54
- ⑮ 田村将人、1912 年、サハリン先住民と研究者、行政の三者に関するメモ、北海道開拓記念館研究紀要、査読無、第 39 号、2011、117-124
- ⑯ 井澗裕、城下町としての豊原：豊原は本当に「小札幌」だったのか？、サハリン・樺太史研究、査読無、第 1 集、2010、47-61
- ⑰ 塩出浩之、日本人樺太植民者の政治的帰属、サハリン・樺太史研究、査読無、第 1 集、2010、20-23
- ⑱ 三木理史、20 世紀の日本における樺太論の展開、サハリン・樺太史研究、査読無、第 1 集、2010、16-19
- ⑲ 白木沢旭児、樺太における終戦、サハリン・樺太史研究、査読無、第 1 集、2010、68-71
- ⑳ 竹野学、戦前期樺太における商工業者の実像：豊原商工会議所の活動を中心に、サハリン・樺太史研究、査読無、第 1 集、2010、106-111
- 21 谷本晃久、“近世アイヌ史”をとりまく国際的環境、新しい歴史学のために、査読有、第 277 号、2010、17-28
- 22 谷本晃久、「夷酋列像」をよむ、荒野泰典編『日本の対外関係 6』吉川弘文館、査読無、論文集、2010、291-304
- 23 谷本晃久、幕末・維新期の松前蝦夷地とアイヌ社会、明治維新史学会編『講座明治維新』第 1 巻、有志舎、査読無、論文集、2010、160-190
- 24 麓慎一、大谷光瑞と樺太、柴田幹夫編『大谷光瑞とアジア』勉誠出版、査読無、論文集、2010、109-131
- 25 麓慎一、幕末・維新时期における帝政ロシアと日本、明治維新史学会編『講座明治維新』第 1 巻、有志舎、査読無、論文集、2010、108-137
- 26 三木理史、日本における植民地理学の展開と植民地研究、歴史地理学、査読有、第 52 巻第 5 号、2010、24-42
- 27 谷本晃久、帳簿の概要とアイヌ交易研究、東京大学史料編纂所紀要、査読無、第 20 号、2010、161-169
- 28 田村将人、樺太庁による「土人漁場」を中心とした先住民政策の概要、北海道開拓記念館『北方の資源をめぐる先住者と移住者の近現代史』、査読無、論文集、2010、69-80
- 29 田村将人、樺太アイヌの歴史を追って、北海道立北方民族博物館友の会 Art Circle、査読無、第 74 号、2010、14-17
- 30 田村将人、サハリンとウラジオストクにある博物館、文書館の刊行物あれこれ、北海道・東北史研究、査読無、第 5 号、2009、59-63
- 31 今西一、国内植民地論・序説、商学討究(小樽商科大学)、査読無、第 60 巻第 1 号、2009、1-20
- 32 三木理史、樺太時代の歴史地理、地理、査読無、第 54 巻第 5 号、2009、28-35
- 33 麓慎一、近代日本と千島アイヌ：辺境における政策史、浪川健治編『周辺史から全体史へ』清文堂出版、査読無、論文集、2009、250-285
- [学会発表] (計 15 件)
- ① 原暉之、ロシアの大戦・内戦とウラジオストクの日本人居留民、シンポジウム「植民地社会の比較史」、2012 年 8 月 19 日、北海道大学(札幌市)
- ② 井澗裕、帝国日本と北方都市：北海道と樺太、シンポジウム「植民地社会の比較史」、2012 年 8 月 19 日、北海道大学(札幌市)
- ③ 井澗裕、Happy Days after the Happy End?: The Modern History of the Kuril Islands, Border region in transition VII, 2012 年 11 月 20 日、東西大学(韓国)
- ④ 三木理史、南満州鉄道の成立と大豆輸送：駅勢圏の京成とその規程要因、第 55 回歴史地理学会大会、2012 年 5 月 13 日、新潟大学(新潟市)
- ⑤ 谷本晃久、サハリン・アイヌ交易帳簿の世界、ニコライ・A. ネフスキー生誕 120 周年記念シンポジウム、2012 年 10 月 4 日、ロシア科学アカデミー東洋古籍文献研究所(ロシア)
- ⑥ 石川亮太、帝国のインフラストラクチャーと仁川華商：日露戦争前後を中心に(韓国語)、韓露国際学術会議「韓露交流の昨日と今日、そして仁川の役割」、2012 年 11 月 2 日、仁川広域市立博物館

- ⑦ 麓慎一、近代日本と新潟：ロシア極東との関連を中心に、新潟県社会科教育学会研究大会、2012年3月10日、新潟会館（新潟市）
- ⑧ 塩出浩之、移民と植民の政治史、日本政治学会2011年度研究大会、2011年10月8日、岡山大学（岡山市）
- ⑨ 三木理史、戦時期満洲産業移民構想の成立と挫折：満洲移民史研究の再考、社会経済史学会第80回全国大会、2011年5月4日、立教大学（東京都）
- ⑩ 石川亮太、20世紀初頭の朝中貿易：華商の活動を中心に、シンポジウム「辛亥革命と東アジア」（東アジア近代史学会）、2011年10月29日、福岡市エルガーラホール（福岡市）
- ⑪ 井潤裕、Korsakov and Odomari: Transition of Border and Landscape, Western Social Science Association 53rd Annual Conference, 2011年4月16日、ソルトレイク市（米国）
- ⑫ 井潤裕、Sakhalin Kuriles: The Prospects of the Japan Russia Border Changes, Eurasia Borderlands Review, Seminar organized by Centre for Eastern Studies (Warsaw), Slavic Research Centre, 2011年9月2日、ワルシャワ市（ポーランド）
- ⑬ 井潤裕、Mobile Border and Townscape: A City in Sakhalin, Korsakov, Border Regions in Transition X Ith Conference, 2011年9月8日、ジュネーブ市（スイス）
- ⑭ 白木沢旭児、戦前期北方圏における企業経営：開発と伝統、経営史学会第46回全国大会、2010年10月3日、札幌大学（札幌市）
- ⑮ 麓慎一、開国と函館：太平洋と東アジアの結節点となった町、外国人居留地研究会全国大会、2009年10月10日、函館市中央図書館（函館市）

〔図書〕（計3件）

- ① 三木理史、塙書房、移住型植民地樺太の形成、2012、420
- ② 今西一編著、小樽商科大学出版会、北東アジアのコリアン・ディアスポラ：サハリン・樺太を中心に、2012、339
- ③ 原暉之編著、北海道大学出版会、日露戦争とサハリン島、2011、426

〔その他〕

ホームページ
サハリン・樺太史研究会ホームページ
<http://sakhalinkarafutohistory.com>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

今西 一 (IMANISHI HAJIME)
小樽商科大学・商学部・教授
研究者番号：20133621

(2) 研究分担者

竹野 学 (TAKENO MANABU)
北海商科大学・商学部・准教授
研究者番号：00360892
石川 亮太 (ISHIKAWA RYOTA)
立命館大学・経営学部・准教授
研究者番号：00363416
白木沢 旭児 (SHIRAKIZAWA ASAHIKO)
北海道大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：10206287
井潤 裕 (ITANI HIROSHI)
北海道大学・スラブ研究センター・GCOE 研究員

研究者番号：10419210

谷本 晃久 (TANIMOTO AKIHISA)
北海道大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：20306525
麓 慎一 (FUMOTO SHINICHI)
新潟大学・人文社会・教育科学系・准教授
研究者番号：30261259

塩出 浩之 (SHIODE HIROYUKI)
琉球大学・法文学部・准教授
研究者番号：50444906

三木 理史 (MIKI SATOFUMI)
奈良大学・文学部・准教授
研究者番号：60239209

田村 将人 (TAMURA MASATO)
北海道開拓記念館・学芸部・研究員
研究者番号：60414140

原 暉之 (HARA TERUYUKI)
北海道大学・スラブ研究センター・名誉教授
研究者番号：90086231

金 鎔基 (KIMU YONGI)
小樽商科大学・商学部・教授
研究者番号：90281873

(3) 連携研究者

なし

(4) 研究協力者

天野 尚樹 (AMANO NAOKI)
北海道大学・スラブ研究センター・GCOE 研究員

研究者番号：90647744

中山 大将 (NAKAYAMA TAISHO)
北海道大学・スラブ研究センター・日本学術振興会特別研究員
研究者番号：00582834